

漢法苞徳塾資料	No. 308
区分	論説
タイトル	我々が取り組むべき課題をめぐって - 古典鍼灸の立場から -
著者	八木素萌
作成日	1996.08

1. 日本経絡学会討論がもたらした貴重なもの

- a. 脈診主導の証決定への反省としての議論。六部定位脈差診の適応範囲問題・脈状の重視・他の四診情報との参考問題。～腹診・舌診・蒙色診などとの関連。
- b. 「証とは証^{あかし}である」論に関して、証の要件を論じられた。「経脈の虚実判断を表現した証」の概念を再検討した「証概念」の問題が出た。
- c. 「証」を定義する視点が提案された。間中・長沢・島田・小川・八木など…
- d. 病的反応は多層的に表現されていることが指摘され、その多層性を明確に意識した対応の重要性の問題が提起された。
- e. 病因〔六因・七情〕と病態〔寒熱・虚実・陰陽・表裏・燥湿・痰・飲・瘀・腫・脹・労・怠惰などや病性や緩急長短などの病程のごとし〕と患者の体質〔感受性と反応性の相違〕に応じた配穴・手技〔刺法〕の選択のための理論と方法論の確立の必要性が強く意識された。
- f. 鍼灸医学のための病症論・病証学の確立の必要性が強調された。
- g. 中医学的鍼灸に対して評価が行なわれ注文点も提出された。

など等を挙げることができよう。それは、次のような課題を投げ掛けていると言えるのではあるまいか。

2. 我々が取り組まなければならない課題について

- a. 既に意識されて具体的な取組が始まっている「鍼灸における病証学の確立」は、如何に効率的に達成して行くかが、大きな問題である。大学と臨床家が組織的に協力して、分業と総合をやって行けるような方式と組織が探られなければならないだろう。これはつまり診断の理論的な根拠を明示するための「病態学・病理学・生理学」などの全面的な開陳と言うことである。
- b. 臨床上の具体的な補寫決定の選択基準の論が、鍼灸治療学の体系に明快に位置付けられて、その一環の重要なファクターとして記述されなければならない。つまり、一般的に「虚に対する補・実に対する寫」と論じただけでは『靈枢』根結第5の記述や『難経』の記述や「汪機」の『鍼灸問対』の記述の水準にも遠く及ばない。臨床判断の尺度として具体的に有用な基準が必要なのだ。

- c. 歴史的に蓄積されて来た大量の漢法医学文献から、「医案」と言われている「治見録」を軸にして、診断・治則の選択・治法の確定・選穴・配穴・取穴・などを一定の目的意識に従って分類整理する仕事、この達成から各科別に診療の体系として、まとめあげられなければならない。
 - d. 病態に応ずる取穴と刺法の研究と確立。
 - e. 「気・血・榮・衛」などの体成分に対応する「経脈・穴・手技・刺法」の体系化や、体内のある組織〔皮毛腠理・血脈・肌肉・筋・骨〕に対応する「取穴と刺法」の体系的な全面記述などが必要である。
 - f. 各種の手技の体系的な整理統合と、それらの運用問題の明確化と、その記述。
 - g. 證確定の問題には、四診総合の立場に立とうとすれば、相互に矛盾することが少なくない診察情報から、統合されて立体的な「病像の形成」に必要な論理部分～アルゴリズムとも言える部分～を明快にすると言う課題がある。これは病的反応の多層性の構造論と不可分な問題でもある。
3. 再整理すれば、次のようになる。
- a. 證論のために生理学・病理学・病態学・診断学・治療学までも包含した「鍼灸のための病証学」の確立と体系的な全面記述。
 - b. 虚実概念は臨床上の補寫選択論と不可欠な前提的理論問題である。治療論・治療手技選択論とも不可分な関係にあるものである。これの明確化が必要である。
 - c. 「病態に応ずる取穴と刺法」「体成分に応ずる取穴と刺法」「治療対象となる体組織に対応する取穴と刺法」「病因に応ずる取穴と刺法」などが、十分に体系的に記述される必要がある。
 - d. 各種の手技を統合して体系化して運用基準を明確に確定すること。
 - e. 證確定のアルゴリズムの明示、これには病的な表象の多層性を、統合的・立体的な病像の構成として、析出する問題の解決も含まれている。